

付篇

## 吉田遺跡第 I 地区 E 区の未報告図面及び写真について

田畑 直彦

### 1 はじめに

当館は平成4年度に、吉田構内への統合移転時に発掘調査が行われた吉田遺跡第 I 区 E 区の報告を行った<sup>1)</sup>。その際、試掘調査に関しては、調査日誌が残されていたものの、図面が所在不明であったため、概要については文章でのみ報告を行った。また、写真類についても一部の写真しか残されていなかったため、調査前全景、第2号竪穴住居跡の写真を掲載するにとどまった<sup>2)</sup>。その後、平成7・9年に教育学部地理学準備室で統合移転時の発掘調査の記録類が発見された際、その中に吉田遺跡第 I 地区 E 区の試掘調査の平面図・写真等が含まれていることが判明した。

一方、平成10年度に実施した第2学生食堂の増築及び改修工事に伴う発掘調査区（本書第3章 以下「第2学生食堂調査区」）では、上記の試掘調査区の一部が検出された。また、第 I 地区 E 区の平面図に記載された電柱が2本存在し、そのうち1本の位置を記録することができたため、第 I 地区 E 区とのおおよその位置関係が判明した。以下では、未報告図面及び写真の報告と第2学生食堂調査区との位置関係について報告を行いたい。なお、写真の一部についてはすでに公表している<sup>3)</sup>。

### 2 図面類

「山口大学学生食堂付近実測図（縮尺1/1200）」、「食堂建設予定地ボーリング調査図（縮尺1/250）」は、昭和46年8月24日に実施されたボーリング調査の範囲等について記されている。両図によると、調査対象範囲は食堂敷地から構内道路までを含む範囲となっている。また、後者の図では、溝状遺構付近で「須恵器片多数散布」の記載があるほか、黒曜石片が複数箇所採集され、包含層ないし遺構の一部が露出していたことの記載がある。また、小野忠熙氏によるとみられるボーリング調査・試掘調査に関する指示が記載されている。

試掘調査の平面図（縮尺1/100）は「吉田第 I 遺跡 E 地区 S. 46. 9. 12.」と記載されている。平板測量図で、現状で3分割されている。図にはトレンチの位置のほか、遺構ないし包含層が検出された箇所は茶色が塗られていた。3枚の図を合成しているため、合成箇所若干

のズレがある。また、この平面図にはトレンチの名称や検出された遺構に関する記載がほとんどないが、これらについては調査日誌に記載がある。また、2本の電柱の位置が記録されているが、前述のように平成10年度段階でも存在した。Fig. 85・86の試掘調査の平面図は3枚の図を合成し、トレンチ名称や遺構に関する情報を加えたものである。

Fig. 85は試掘調査の平面図と平成4年度報告の事前調査区及び地形図を合成したものである。試掘調査区は東西方向のトレンチについて、a～gトレンチの名称が付されている。南北方向にもトレンチがあり、一部のトレンチに①～⑩の番号が付されているが、図が煩雑となるので記載は割愛する。fトレンチは12箇所のトレンチの総称とみられる。第2学生食堂調査区でその一部が検出されたため、今回説明の都合上、1～12の番号を付した。なお、fトレンチの西側にもトレンチが2箇所あるが名称は付されていない。

Fig. 85を見ると、試掘調査と事前調査区の平面図には若干のズレがあるが、事前調査区で検出された溝状遺構や竪穴住居跡については試掘段階で確認されていたことが確認できる。一方、東北部では、柱穴群と方形の遺構1基が記録されている。これらについて平面図には記載がないが、昭和46年9月9日の調査日誌には「柱穴群（中世のものか?）」との記載がある。南東部は追加調査箇所である。追加調査の平面図とはズレがあるが、この付近には不整形の遺構が2箇所（竪穴住居跡と土坑か?）が記録されている。その他、溝状遺構の西側には遺構もしくは包含層が散在する。一部に「包含層か?」、「包含層」の記載があるが、詳細は不明である。

次に第2学生食堂調査区との位置関係について述べる。同調査区では第I地区E区試掘調査fトレンチの一部を検出した。特にf6～f9については等間隔に配置されている状況が確認できた。また、第I地区E区で記録された電柱と位置とf6～f9の方向を合わせたところ、f2・3・11・12についても、対応する箇所でトレンチ跡が存在することを確認できた。Fig. 86は平成10年度以前の全調査区の合成図、Fig. 87は第I地区E区の主要遺構と第2学生食堂調査区の合成図で、『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』Fig. 80の改訂版<sup>4)</sup>である。なお、上記を根拠に図を合成すると第I地区E区の偏角にズレが生じるが、Fig. 85～87では原図の方位を図示した。実際の方角はFig. 86・87の構内座標を参照されたい。

### 3 写真

PL. 66 (1) は調査前の写真である。写真右側に見える2本の電柱が平面図に記載されたもので、同じ電柱は平成10年度段階でも第2学生食堂建物東側に存在した(PL. 24)。PL. 66 (2)・

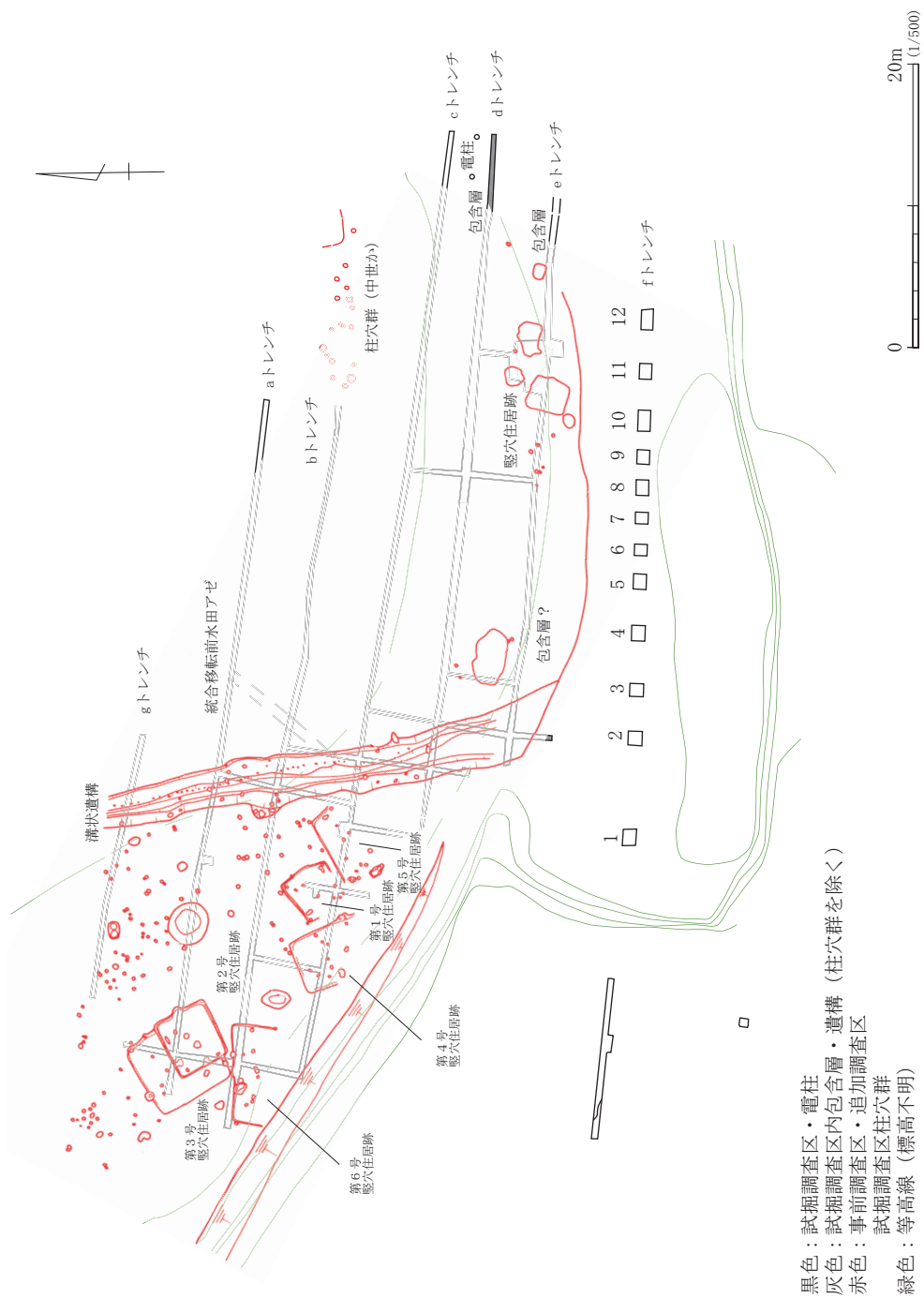


Fig.85 第I地区E区平面図

黒色：試掘調査区・電柱  
 灰色：試掘調査区内包含層・遺構（柱穴群を除く）  
 赤色：事前調査区・追加調査区  
 試掘調査区柱穴群  
 緑色：等高線（標高不明）

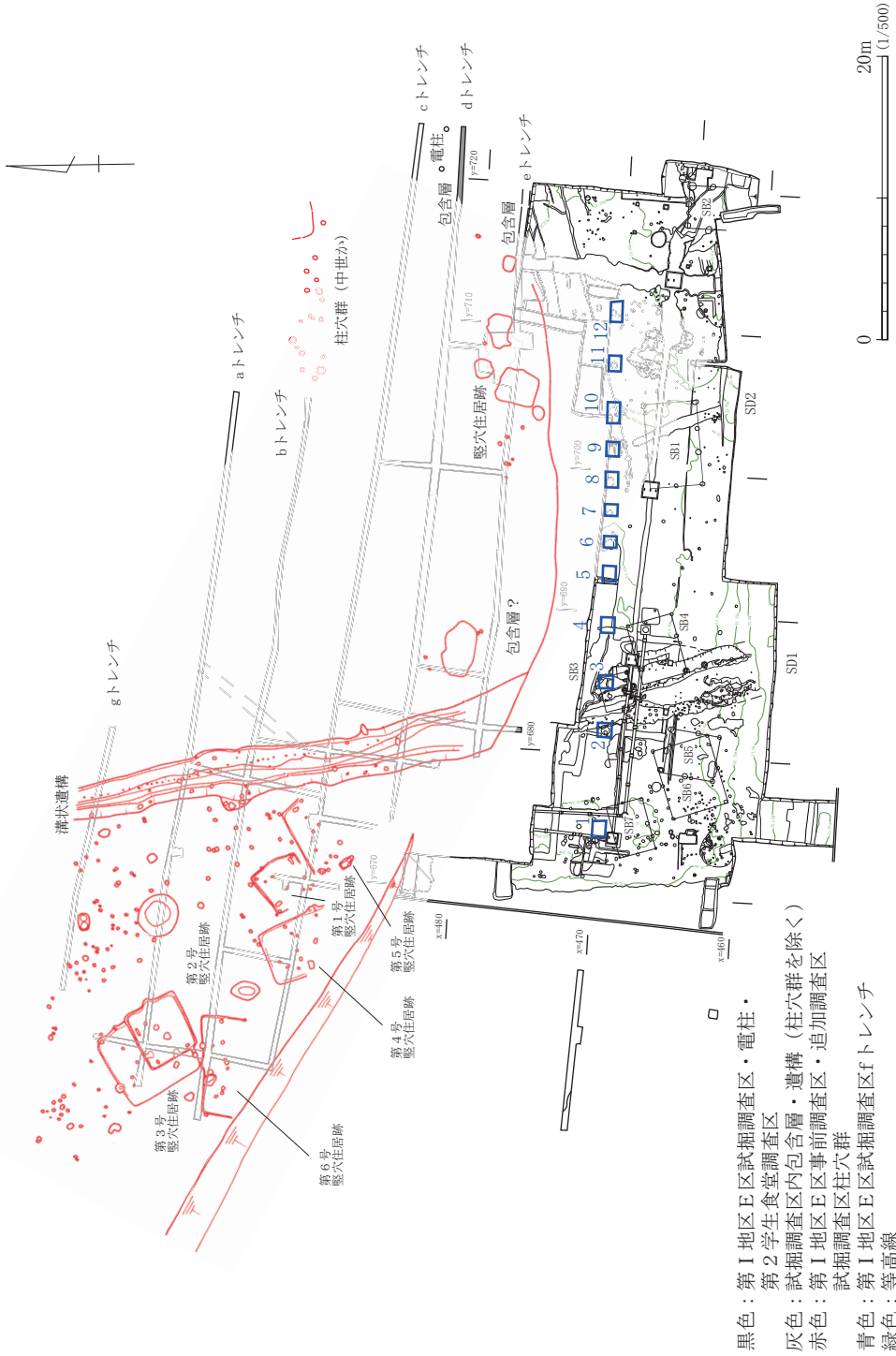


Fig.86 第1地区E区・第2学生食堂発掘調査区平面図1

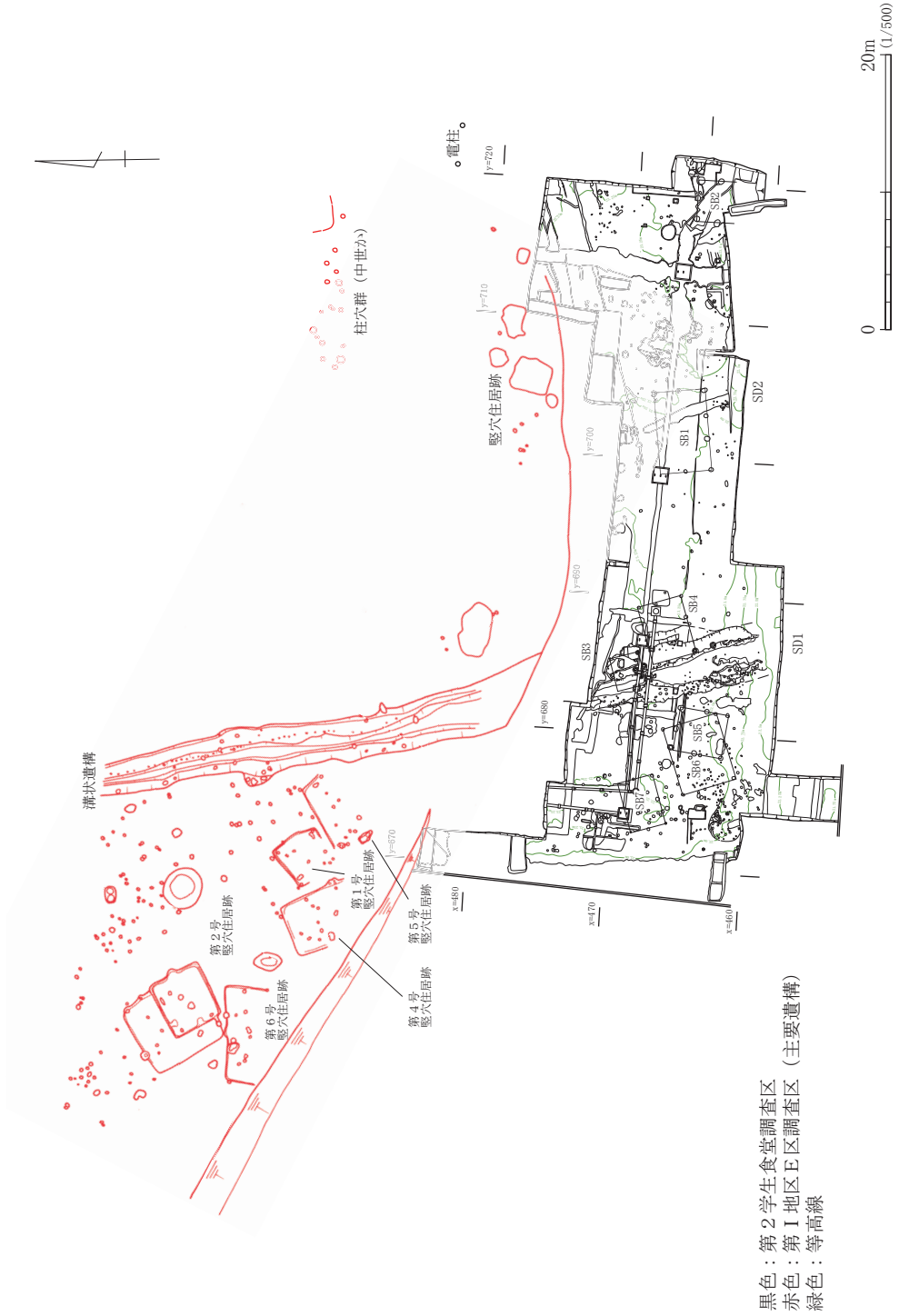


Fig.87 第I地区E区・第2学生食堂発掘調査区平面図2

(3)は試掘調査時の写真である。両写真は「第Ⅰ区-E」と記載された袋に収納されていた。両写真のトレンチ上方に見えるのは第2学生食堂北側の丘陵部と道路とみられるので、道路に近接しているPL.66(2)をgトレンチ、やや南側にあるPL.66(3)をaトレンチと推測する。PL.67(1)は事前調査区のほぼ全景を西から撮影したものである。中央に第2・3号竪穴住居跡などの主要遺構、東側に溝状遺構が見える。また、試掘調査b・cトレンチの一部が見える。PL.67(2)は第2・3号竪穴住居跡、PL.68(1)は第1号竪穴住居跡、PL.68(2)は第6号竪穴住居跡、PL.68(3)・(4)は第4号竪穴住居跡の写真である。第2・3号竪穴住居跡以外は残存状況が悪かったことがうかがえる。PL.68(5)～(7)は溝状遺構の写真である。PL.68(5)・(7)は北部を撮影したものである。深さは約20cmと報告されているように、断面形は浅い逆台形を呈していることがわかる。また、概報で「柵か垣の跡」とされた柱穴<sup>5)</sup>が見える。PL.68(6)は南部を撮影したものである。北部よりやや深くなっていること、北部よりも柱穴の分布が疎らである。

#### 4 考察

今回の検討により、第Ⅰ地区E区は食堂敷地とその東側の構内道路を対象に試掘調査を行い、遺構の分布が密であった箇所について事前調査・追加調査を実施したことがうかがえる。また掘立柱建物等の施設を区画するための溝であったとみられる溝状遺構・SD1の全長は図上で49.2mであることが判明した。溝状遺構の北端は未調査であり、SD1の南端は削平されていたので、全長は50mを超えていたと推測される。上記と関連して注目されるのは試掘調査bトレンチ東側で検出された柱穴群である。中世かとの記載があるのみで詳細は不明であるが、古代の柱穴も含まれていた可能性があるほか、調査範囲を広げれば掘立柱建物跡等を確認できた可能性もあろう。

一方、第2学生食堂調査区の調査成果を踏まえると、第Ⅰ地区E区の溝状遺構埋没後も中世の柱穴等の掘り込みがあった可能性が高い。上記のように溝状遺構の深度は浅いので、溝状遺構床面まで後世の柱穴の掘削が及んだ可能性もある。溝状遺構からは高台を持つ土師器塚が報告されている<sup>7)</sup>。上記のうち、Fig. 82-38は混入であることが指摘されている。このほか、「高台の幅が狭く、突出がきわめて高いもの」とされたFig. 82-31・32についても、埋没後に掘り込まれたピットに含まれていたか、窪地となった最終段階に廃棄された可能性が高い。以上を踏まえ、第Ⅰ地区E区の溝状遺構は第2学生食堂調査区で考察したように、9世紀代のうちにほぼ埋没したものと推測する。

## 5 おわりに

以上、第Ⅰ地区E区の未報告図面と写真について報告を行い、若干の考察を行った。第Ⅰ地区E区・第2学生食堂調査区の埋蔵文化財は記録保存され、遺構は現存しないが、古墳時代の竪穴住居跡はさらに西方の遺跡保存公園にかけて分布する可能性が高い。また、古代の遺構に関しては、第2学生食堂敷地東側の農学部実験畑にかけて分布し、耕土下に保存されている。今後は上記地域の埋蔵文化財の保護に、第Ⅰ地区E区・第2学生食堂調査区の調査成果が活用されることが望まれる。

### [注]

- 1) 豆谷和之「付篇Ⅰ 第1章 吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査」「同第2章 吉田遺跡第Ⅰ地区E区の追加調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』、1994年）
- 2) 昭和60年度に実施した学生会館環境整備に伴う試掘調査の報告では、森田孝一氏が撮影した第Ⅰ地区E区の全景、溝状遺構、大形土壇（第1号土壇）の写真を掲載している（山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内学生会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年））。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館『学内発掘20年の歩み』、1998年
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』、2004年）
- 5) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区E区発掘調査概報』、1972年
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「学生会館新営予定地M-14・15区の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。この調査区では平面形一辺約5mの竪穴住居跡が検出され、検出時に上面から弥生時代後期の遺物が出土したとされる。しかし、同調査区一帯は弥生時代を通して遺構・遺物が分布する地域である。また、第Ⅰ地区E区第6号竪穴住居跡から弥生時代終末期の高杯口縁部片が出土していることを踏まえると、上記の竪穴住居跡は古墳時代中期に帰属する可能性がある。
- 7) 前掲注1）第1章